東書　二年下

ニャーゴ　授業計画（計五時間）

目標　絵本を味わい、紙芝居を楽しむ。

第一次指導（概観の指導）　一時間
第二次指導（詳しく読む）　二時間
第三次指導（紙芝居の活動）　二時間

第一次指導（話を整理し、話の山を探す）

◎　区画　挿絵に合わせて　計七区画（指示）
1 p0L1 2 p1L8 3 p2L13 4 p4L2
5 p5L3 6 p6L1 7 p7L5

一　よむ（席順　区画　音読　七名）

二　とく（読後感の整理の話し合い）

○　題目（題から話の輪郭を明らかにする）

・「ねずみ」と「ねこ」の面白い話

・『ニャーゴ』は誰の声　聞いたのは

◎　ひびき（印象の強いところを話し合う）

・三回鳴いた『たま』の絵を読む

○　手引き（書き出す言葉の指示）

・猫のしたこと（ねこは の文から）

三　よむ（手引きに従い黙読）

・1、5は○、2、3は全員で

四　かく（選んだ語句を視写　師は板書）

五　よむ（板書を全員で指黙読・指音読）

六　とく（板書事項をもとに話し合う）

○　事実（板書事項を関連付ける）

・ニャーゴと鳴いたのを何と聞きた。

・食べたもの（食べたいもの）土産
区分（たまと3匹のねずみが一緒の所
そこを二区分　計四区分）

◎　山（詳しく読んでいくところの発見）

・話が面白くなったもとの所とたまが子ねずみを食べることを忘れてしまった所

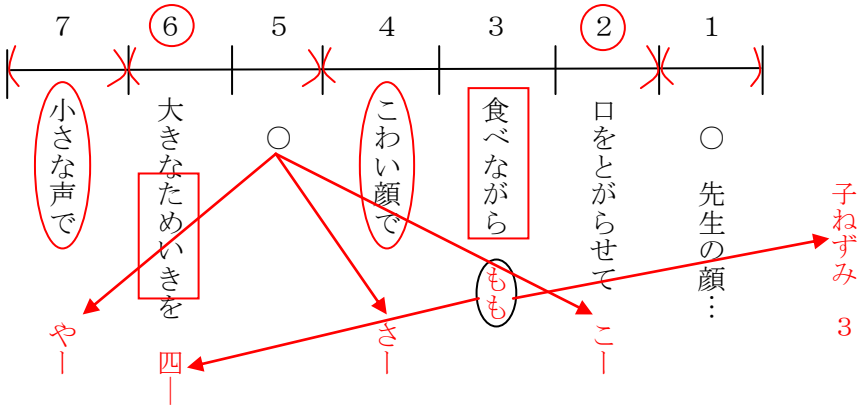
○　余韻　この話を聞いた先生の顔は…？

七　よむ（全員で板書を指音読）

（板書事項）

たま

ニャーゴ



第二次指導第一時（山の①を詳しく読む）

一　よむ（七名　音読）

二　とく（前時の復習と本時に繋ぐ話し合い）

○　おさらい

・ねずみの『ニャーゴ』は何番　小さな声・怖い顔・2・3・6に書いた漢字

・三区分に整理

◎　承接

・先生の話　猫の習性　たまの勘違い

○　手引き

・たまと子ねずみの最初の会話

三　よむ（指示された部分を黙読）

四　かく（三よむと同時に視写）

五　よむ（全員で板書を指黙読、指音読）

六　とく（板書された文章について話し合う）

○　語義（意味や働きの難しい語句）・区分

・どきっと　だあれ　…言ってしまって顔を赤くする　ふうん　段落で二区分
前　ねずみとたまで三区分　後　二区分
言ったところとその訳に二区分

◎　心（文章の核心を話し合い、味わう）

・たまの動転（ねずみの予期せぬ対応）

・「だあれ」→どきっと→繰り返し……

・顔を赤く→『たま』と名乗って……

○　子ねずみの対応の明るさ

余韻（たま、どうしたんだろう）

七　よむ（全員で板書を指音読）

〈板書事項〉

7 6 5 4 3 2 1
小 大 ○ 顔 食 口 ○

ねこは、どきっとしました。「そこで、子ねずみはもう一度、「おじさん、だあれ。」◎◎◎◎・・・・！と、元気よく聞きました。」「だれって、だれって……たまだ。」ねこは、言ってしまってから、少し顔を赤くしました。」「そうか、たまか。ふうん。」

第二次指導第二時（山の②を詳しく読む）

一　よむ（七名　音読）
二　とく（前時の復習と本時に繋ぐ話し合い）
○　おさらい
・　たまの顔が赤く→どきっと→名前
・　明るい子ねずみ→元気よく→ふうん
◎　承接
・　桃狩り→せなか→食べる→食べてやる
○　手引き
・　お土産を分ける話（四つ猫に）
三　よむ（指示された部分を黙読）
四　かく（三よむと同時に視写）
五　よむ（全員で板書を指黙読、指音読）
六　とく（板書された文章について話し合う）
○　語義・区分
・　へえ　もよね　よ　ううん　ためいき
区分　話者の確認　（三区分あげる前後）
◎　心（文章の核心を話し合い、味わう）
・　たまがため息をついたのは→「ううん」
「一つじゃたりない」→四匹
「あげる」→ぼくも…よ→ぼく…も
○　余韻（たまは子ねずみの優しさに胸がいっぱいになって食べるのを忘れた…
七　よむ（全員で板書を指音読）

〈板書事項〉

もも　せなか
×食―

た―「おれのうちには、子どもがいる。」
子―「へえ、何びき。」
た―「四ひきだ。」「四ひきもいるなら、一つじゃ足りない
よね。ぼくのあげる。」「ぼくのもあげるよ。」
た―「ぼくのももも。」「
「ううん。」

ねこは、大きなためいきを一つつきました。

第三次指導（紙芝居をする）

一　絵は担任が一組用意する。

二　準備

役割分担を決める。

・班ごとに　絵を繰る係り

登場人物

地の文

・区画　1～4か4～7を選ぶ

三　練習

・会話部分の演じ方を相談する。

驚いている声

驚かそうという声

大きな声

小さな声

明るい声

怖い声

優しい声

・地の文の読み方を相談する。

ゆっくりはっきり読むことが基本

各班ごとの工夫を生かす

四　発表会

一度に全部の班の発表は、聞く方が飽きて来るので、二〇分くらいで止め、二、三回に分ける。残りの時間には別な課題をする。（ドリル学習等と組み合わせる）